

2020年4月26日 大井バプテスト教会 礼拝説教
説教題「ずっとそこに変わりなく」マタイによる福音書5章1～10節
主任牧師 加藤 誠

**「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。
悲しむ人々は、幸いである。彼らは慰められる。
柔和な人々は、幸いである。その人たちは地を受け継ぐ。
義に飢え渴く人たちは幸いである。その人たちは満たされる」(マタイ5・3～6)**

世界中が今、大きな困難の中を歩んでいます。新型コロナ・ウィルスで世界は一変しました。そして私たちの日々の暮らしも一変しました。会社の責任を負っている方が「これまで経験した困難の中で、一番厳しい困難かもしれない」と、ご自身の両肩にのしかかる重荷の大きさを語っておられました。先の見えない暗闇の中に、少しでも希望の出口が見えてくるようにと祈り願います。

一方で、今まで当たり前のようにできていたことができなくなって、見えて来たこと、気づかされたことがあるのではないのでしょうか。例えば、私たちの社会を支えている「キー・ワーカー」と呼ばれる人たちの仕事の大切さが見えてきています。医療従事者、保育士、介護士、公共交通機関職員、スーパーマーケット従業員、清掃業者などなど。地域社会を支える「カギとなる労働」に携わりながら、厳しい処遇で働いている人びとの存在の大きさに気づかされ、「感謝」が語られるようになりました。そのような「感謝」を大切に届け合うことができたらと思います。

東北の岩手県北上市で伝道をされているS牧師がおられます。東日本大震災の時に会った他教派の牧師さんですが、ブログでこんな発信をされていました。

「桜並木で有名な展勝地の駐車場が閉鎖されると聞いて、ライトアップの消えた夜に出かけてみた。桜並木の向こう側に街灯りが見えるほかは真っ暗な公園で、いつもはあまり見えないものが結構よく見えた。ライトがあるとかき消されてしまう星空にちょっとした感動を覚えた。あるのが当たり前と思えていたものが次々と取り去られ、閉ざされた時に、ずっとそこに変わることなくあった神さまの恵みに気づけるなら、それは何よりの再発見だ。厳しい時が続いているけれど、そんな再発見できたら幸いに思う」。

「ずっとそこに変わることなくあった神さまの恵みに気づけるなら、それは何よりの再発見だ」。

いつも当たり前のことができなくなって、改めて神さまの恵みに気づかされる。それは一つの「方向転換」でしょう。主イエスは私たちのすぐそばにおられるのに、私たちが心を向けている方向が自分中心の時には、主イエスの恵みは見えないし、主イエスの祈りを聞くことができません。主イエスが「サタンよ、退け」と、ペトロを厳しく叱りつけたことがあります。十字架の道を歩まれる主イエスが理解できなくて、ペトロが「そんなことがあってはなりません」と主イエスの前に立ちふさがった時のことです。「サタンよ…」とは厳しい言葉ですが、「わたしの後ろに回り

なさい」という意味でしょう。「あなたはわたしの前に出てしまって、わたしが見えなくなっている。わたしの後ろに回りなさい」と、主イエスはペトロに厳しく教えられたのでした。

主イエスの後ろに回り、十字架の主を前に、まず主が語られる言葉、祈りに集中していく。そのために、主イエスは私たちを「山」(礼拝)に招かれます。マタイ福音書で、主イエスが宣教活動を始めるときに、弟子たちを「山」に招き、神の国の新しい言葉を語り教えられました(マタイ5章)。その神の国の宣教は「幸いなるかな!」という言葉で始まります。それは、私たちがふだん考える「さいわい」とはまったく違う、むしろ正反対の、不可解な言葉です。

5章3節から10節には「八つの幸い」が語られているので「八福の教え」とも言われていますが、特に前半の四つは、私たちには受け入れがたく、理解しがたい「さいわい」ではないでしょうか。3節「心の貧しい」とは「心がすっかり砕かれて小さくなっている状態」、4節「悲しむ」は「私たちが経験する中で最も深い悲しみ」、5節「柔和」は「人に指示できるような権力をもっていない状態」、6節「義に飢え渴く」は「神さま、どうしてですか!と訴えている状態」を、それぞれ意味すると言います。そこまで「小さく、悲しく、力なく、訴えている状態」がどうして「幸いだ!」と言えるのでしょうか。

わたしは、これらの言葉は「格言」のようなものではなく、「主イエスのさいわい宣言」だと受け止めています。主イエスご自身が、この世界で今、どのような状態の人たちに神さまの「幸い」を届けにきてくださったのか。主イエスが、どのような人たちと「一緒に歩む覚悟」で宣教を始められたのか。その決意と覚悟を宣言された言葉だと理解します。今、この世界で「心を砕かれて小さくされ、悲しみに沈み、力を奪われ、神さまに訴えるしかない!…」、そんな状態を生きているあなたたちと、わたしは共に歩む!一緒に神さまの「幸い」を受け取っていきましょう!と呼びかけておられる宣言として聴くのです。

この世界で十字架に向かって歩まれた主イエスは、小さくささやかな姿で、私たちの間を共に歩まれる「インマヌエルの主」です。どんな時にも、どんな状況においても、神さまの愛をあらわすために、ずっとそこに変わりなくおられる方です。私たちの目が大きなもの、キラキラした華やかなものに目を奪われている時には見えないけれど、私たちがこの世界で経験する悲しみや嘆き、痛みの深みを確かに共に歩みたもう「インマヌエルの主」なのです。

この「インマヌエルの主」が、ふつうなら「さいわい」と思えない現実を生きる一人ひとりの傍らを、「共に歩む深い祈り」を込めて一緒に歩んでくださっています。今、経験している大きな困難の中にあっても、ずっと変わることなく共に居てくださる方。日々、この方の前にまず座り、心と体に向けて、そのみ言葉と祈りを受けていきましょう。一人ひとりがそれぞれの場所でささげる小さな礼拝が、私たちを神の国の「幸い」に導き、私たちの心と体の方向を変え、この世界を神の国に向けて変えていくのです。この「インマヌエルの主」と共に、新しい一週間を歩ませていただきますように。